

第3章

各教科における 言語活動の充実に向けて

国語科における言語活動の充実に向けて

1 国語科としての言語活動のおさえ

- ・自分の考えをまとめる、そしてまとめたものを表現して相手に伝える＝言語活動
- ・言語活動とは本来「話す」「聞く」「書く」「読む」の4つの活動を指す。
- ・国語科のねらいを実現するための言語活動を行う。

国語科の目標

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

- ・基礎的基本的なことを土台として言語活動を行う。

基礎的基本的＝「用語を知る・使う」

「様々な方法を知る・使う」

「原理・原則を活用する」

「構成（仕組み）を知り、活用する」

言語活動例の一覧（学習指導要領）

	「A 話すこと・聞くこと」	「B 書くこと」	「C 読むこと」
小学 一 ／ 二 年	1 尋ねたり応答したりすること	5 絵に言葉を入れること	6 伝えたい事を簡単な手紙などに書くこと
	2 自分が体験した事などについて話をする事	6 伝えたい事を簡単な手紙などに書くこと	9 昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと
	3 友達の話を聞くこと	7 先生や身近な人などに尋ねたことをまとめること	10 絵や写真などを見て想像を膨らませながら読むこと
	4 読んだ本の中で興味をもったところなどを紹介すること	8 観察した事を文などに表すこと	11 自分の読みたい本を探して読むこと
小学 三 ／ 四 年	12 身近な話題についてスピーチすること	15 手紙を書くこと	18 読んだ内容などに関連した他の文章を読むこと
	13 要点などをメモに取りながら聞くこと	16 自分の疑問に思った事などについて調べてまとめること	19 疑問に思った事などについて関係のある図書資料を探して読むこと
	14 身近な出来事や調べた事柄について説明したり報告したりすること	17 経験した事を記録文や学級新聞などに表すこと	
	20 自分の考えを資料を提示しながらスピーチをすること	23 礼状や依頼状などの手紙を書くこと	26 読書発表会を行うこと
小学 五 ／ 六 年	21 目的意識をもって友達の考えを聞くこと	24 自分の課題について調べてまとめた文章に表すこと	27 自分の課題を解決するために図鑑や事典などを活用して必要な情報を読むこと
	22 調べた事やまとめた事を話し合うこと	25 経験した事をまとめた記録や報告にすること	
中 学 校	1 説明や発表などを行うこと	3 説明や記録などの文章を書くこと	6 様々な文章を比較して読んだり、調べるために読んだりすること
	2 対話や討論などを行うこと	4 手紙や感想などの文章を書くこと	7 目的や必要に応じて音読や朗読をすること
		5 報告や意見発表などのために簡潔で分かりやすい文章や資料などを作成すること	

2 単元計画の中での言語活動

(1) 文章を正しく読みとるために

- 作品の内容をとらえさせるために、宿題で音読に取り組みさせる。その際、音読カードを活用し、継続して音読に取り組むことができるようにする。
- 本文に即した読み取りを行うために、自分の考えをまとめる際には、必ず本文中の根拠となる部分を示すようにさせる。

(2) 自分の考えを整理し、発表につなげるために

- 「ノートは財産である」という言葉掛けをし、整理したノートの書き方を工夫させる。
- 自分の考えを整理し明確にさせるために、ノートにまとめさせる。
- 学習の振り返りができるノートづくりを心掛けさせる。
- 主語と述語の関係を正しく使い、自分の考えを書かせる。
- 接続詞を効果的に使わせる。(理由を述べるとき:「なぜならば」「なぜかという」と等)
- 具体的な工夫の手立て
 - ・題材名を書く。
 - ・枠で囲む、赤字で書くなどの工夫をする。
 - ・箇条書きで書いた方がよい場合は、箇条書きにする。
 - ・「—」「○」などの記号を用い、端的にまとめる。
 - ・枠や線を描くときは、必ず定規を使う。
 - ・意味調べや宮沢賢治の思いや考えをまとめるときには、表にまとめる。

(3) お互いの考えを分かりやすく伝え合うために

- 発表の仕方の例を提示する。
 - ・「○○さんと同じで、～です。」
 - ・「○○さんに付け足して、～です。」
 - ・「○○さんと似ていて、～です。」
 - ・「○○さんと別の考えで、～です。」
 - ・「○○さんと同じですが、理由が違います。」
 - ・「○○さんと理由は同じですが、考えが違います。」
 - ・「○○さんの考えを聞き、私は、～と考えを変えました。」
 - ・「○○さんの考えの～が、とても良いと思いました。」
- 自分の考えを全体で述べる前に、ペア学習や少人数グループ等の学習形態を取り入れ、発表に自信を持たせる。
 - ・隣り合うパートナーと行う。
 - ・一人ずつ自分の考えを述べる。
 - ・聞く側は、肯定的に聞く。
 - ・相手の考えの良かったところを述べる。
 - ・お互いの考えの違いを認め合う。
- 全体で考えを発表し合うようなときには、机の配置を「コの字型」にする。
- 授業中、自分の考えを述べることは、良いことなのだということを常に伝え、自信を持たせる。
- 振り返りカードを活用し、「自分の考えを述べることができたか」ということについてカードに記録させ、次時の意欲につなげる。

3 単位時間における言語活動

言語活動（説明・記録・要約・論述）を行うための10の観点

- 1 理由の提示 (～と考えられた理由は…)
- 2 順序 (はじめ 中 終わり) 基本文型
- 3 生かす…活用 (～を使うと・～では) 既習事項などの
- 4 きまり
- 5 類似 (同じところ、似ているところ)
- 6 相違 (違うところ)
- 7 類推 (もし～だと…) 今までの考えを組み合わせる
- 8 具体化 (言葉を置き換える)
- 9 抽象化 (言葉を置き換える)
- 10 批評 (確かめる)

【視点1】「基礎的・基本的な知識及び技能を明確にし、確かな習得を図る」とともに、「思考力・判断力・表現力の育成を図る」ための具体的・効果的な言語活動を位置づけた単元構成と単元の評価の在り方

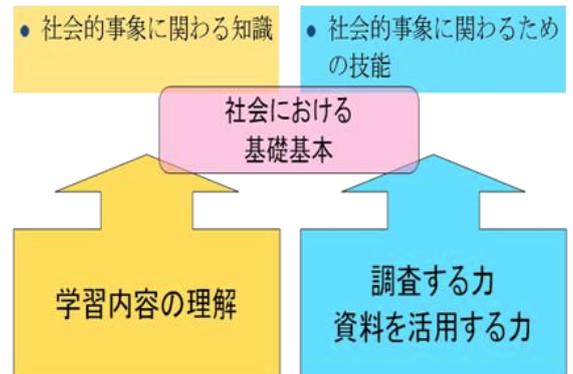
《社会科における基礎・基本について》

社会科という教科の前提として、社会科は「内容教科」であるという点をおさえるべきである。問題解決学習のなかで子ども達に関わる社会事象には、中核となる事項＝知識が存在する。当然のことであるが、授業においてはそれが「学習内容」となる。まず、そうした問題解決の基盤となる学習内容を明確にすること、そして、それをしっかりと子ども達に身につけさせることが社会科における重要なねらいといえる。

また一方で、社会事象に主体的に関わるための「技能＝学び方」を身につけることも社会科における基礎・基本としておさえるべきものとなる。具体的には、見学の際のインタビューの方法や、インターネット閲覧など資料収集のための技能などである。さらには、自分たちで収集した資料や教師が提示した統計資料などを活用する力も身につけるべき学力といえる。

つまり、「学習内容の理解」と「調査する力・資料を活用する力」の双方が、社会科において子ども達が身につけるべき基礎・基本となる。

社会科の基礎・基本を身につける子



《基礎・基本を基盤に、言語活動を通して思考力・判断力・表現力の向上へ》

そうして身につけた基礎・基本（社会事象＝学習内容）の理解を基盤とした上で、そこに適切な学習課題を設定することで、子ども達の思考がスタートする。

その際、自らが考えたことや判断したことを仲間に「表現する場」を設定することで、子どもたちの思考に深まりがうまれる。

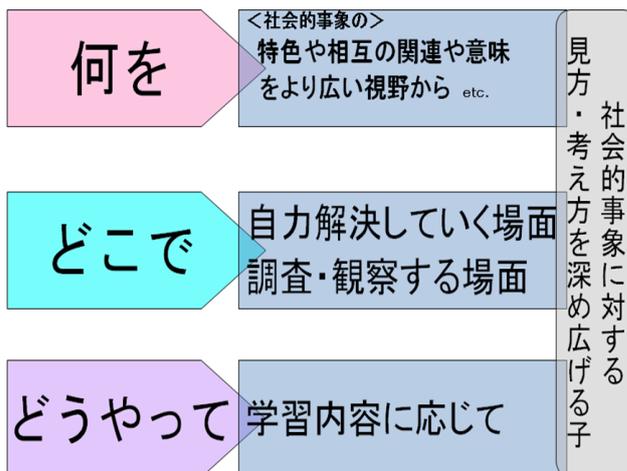
授業中の表現の場としては、「1人で」と「みんなで」それぞれの場面が考えられる。「1人で表現する場」には資料を読んで気づいたことをノートやワークシートにまとめる活動などが、また「みんなで表現する場」としては、挙手発言や交流場面がある。自分の考えをまずは個人として整理し、それをみんなで交流しあうことで、新たな見方や考え方を、



【視点2】問題解決学習を基盤とし、「課題意識（問題意識）」や解決への見通し」をもち、「自ら考え伝え合う場」を意図的・計画的に設定した学習過程の工夫と1単位時間の評価の在り方

《課題意識と解決への見通しをもたせるために》

問題解決学習において、子ども達の社会的事象に対する「課題意識」を高め、学びの見通しをもたせるためには、教師自身が過程における各場面の目的を明確にする必要がある。ある1単位時間の授業において、「子ども達が思考する」場面を設定するとして、「何を」「どこで」「どうやって」という視点で整理が重要となる。そうした学習過程を繰り返すことで、子ども達が問題解決学習の流れを把握し、見通しをもって主体的に学ぶことが可能となる。



《社会科における1単位時間の言語活動の在り方》

社会科において子ども達が意欲的に言語活動に取り組むことができるかどうかは、授業に取り上げる資料がどれだけ子ども達の興味をひき、思考を引き出すことができるかによるところが大きい。

次の写真資料を例として考えてみる。

3・4年生社会科
「昔のくらしとまちづくり」
～昔の道具調べ～

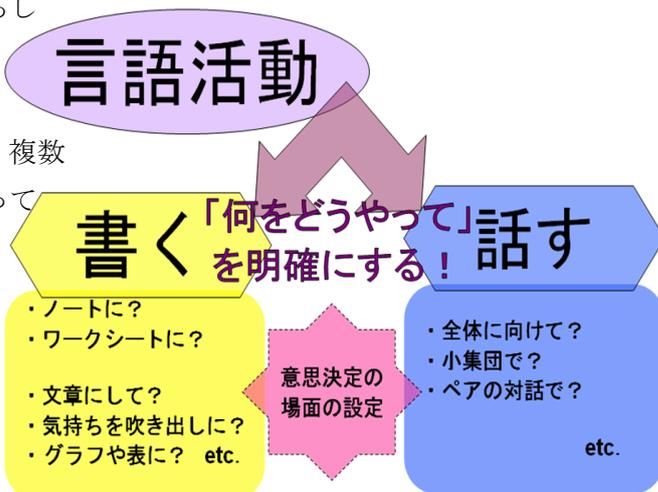
りんごの害虫予防の道具は、どのように変化しているといえるだろうか？

上の写真資料は、3・4年生社会科「むかしのくらしとまちづくり」の昔の道具調べにおいて提示した余市町のりんごの害虫駆除の道具の変化をあらわしたものである。この資料からは、害虫駆除の仕事が、複数的人数で手作業していた時代から、1人で機械によって作業するように変化していることがわかる。

提示する資料が子ども達に学びのねらいに沿った気づきを生むものであるか検討が必要である。

またそうした気づきを言語化する際に、ノートやワークシートに記述するのか、または小集団や全体交流の場で発言するのか、明確にすることが大切である。

とりわけ社会科においては、考えを整理する際に「表やグラフ」にまとめるという活動も考えられる。教師は子どもが自分の考えを「どのような方法」で表現するか明確にすることが大切である。



算数科における「言語活動の充実」

【視点1】「基礎的・基本的な知識及び技能を明確にし、確かな習得を図る」とともに、「思考力・判断力・表現力の育成を図る」ための具体的・効果的な言語活動を位置づけた単元構成と単元の評価の在り方

算数的活動の充実

言語活動の充実

「基礎的・基本的な知識及び技能の確かな習得」と「思考力・判断力・表現力の育成」を図るため、単元構成は算数的活動を通じた問題解決的学習を基盤とすることが重要。また、算数的活動を充実させていくことは言語活動の充実につながる。「考えること」と「表現すること」は互いに補完し合って学びを深めるものである。

算数的活動

- ア 作業的・体験的な活動など身体を使ったり、具体物を用いたりする活動
- イ 算数に関する課題を考えたり、算数の知識をもとに発展的・応用的に考えたりする活動
- ウ 考えたことなどを表現したり、説明したりする活動

大切にしたいことは、児童が目的意識をもって主体的に考える学習が連続されるように単元を構築することである。「できる」ことを目指すあまり、教師の説明中心、練習問題中心の授業の繰り返しでは、習得した内容を活用する力は身につかないし、何よりも算数を学ぶことの楽しさや意義を実感することはできない。したがって単元構築の際には、児童の思い(目的意識や問い)を大切に課題設定、具体的な算数的活動、学びを深める伝え合いの場の設定等、意図的・計画的・継続的に単元を構築しなければならない。

考えたことなどを表現したり、説明したりする活動

- 根拠を明らかにして(既習をもとにして)考え、説明する
 - ・きまりの発見(いくつかの具体例から共通性を発見)
 - ・似たものからの予想(似たような条件や結果から新しい発見)
 - ・すでに正しいことが明らかなことをもとにして、別のことが正しいことを説明)
- 算数の言葉で考え、説明する
 - ・言葉や数、式、図、表、グラフなどに表す。
 - ・図から式に表したり、式から図に表したり、相互に関連させる。
- 互いに考えを伝え合う
 - ・小集団交流や全体交流を通して、自分の考えを伝えることで自分の理解を確認したり、相手の考えを聞くことで新しい考えに触れたりする。

【視点2】問題解決学習を基盤とし、「課題意識(問題意識)」や「解決への見通し」をもち、「自ら考え、伝え合う場」を意図的・計画的に設定した学習過程の工夫と1単位時間の評価の在り方

算数の言葉で考え、説明する

子どもにとって、算数的活動を通して課題解決を行うことは、確かな学力を培うとともに、学ぶことの楽しさや意義を実感するための支援となる。

《実践例：4年「小数のたし算」》

ジュースの入ったびんが2本あります。大きいびんには2.5L、小さいびんには1.9L入っています。合わせると何Lですか。

液量をイメージして

式を使って

$$2.5 + 1.9 = 4.4$$

数直線を使って

さくらんぼの図を使って

言葉や数、式、図、表、グラフ等の知識や技能がなければ、既習を使った自力解決は不十分なものとなる。解決の糸口となる考えに気づき、身につけた方法を駆使して主体的に自分の考えを書いたり説明したりしようとする子どもの姿を目指すためにも、それぞれの学年、学習内容に応じて、言葉や数、式、図、表、グラフ等の解決の糸口となるものを指導していくことが必要である。

《実践例：4年「わり算」》

「問題」と「課題」を明確に。学習内容の本質をとらえ、一般化して考える。

「まとめ」は課題との整合性があるように。

「自分の考え」は、答えを求めて終わりではなく、考え方やその根拠を書き表す。

伝える相手を意識し、また、考えを確かなものにするための図でも表す。

既習を根拠にして考え、説明する

既習を活用して考えようとする姿勢を身に付けていくためには、学習前時までを振り返る、学習指示やノート作りの指導は欠かせないもの。

理科における「言語活動の充実」

視点1

「基礎的・基本的な知識および技能を明確にし、確かな習得を図る」とともに、「思考力・判断力・表現力の育成を図る」具体的・効果的な言語活動を位置づけた単元構成と単元の評価の在り方

《 理科における問題解決的な学習 》

理科という教科において、問題解決的な学習を基盤にして行いやすい教科であると言える。それは前時の習得内容を新たな課題にし、それを活用して本時の問い（課題）にすることができるからである。

また、基礎的・基本的な知識・技能は実験、観察を通して、獲得することが多く、教師にとっても子どもたちにとっても授業において安心して行うことができるからである。

その上で、「何を」「どこで」「どのように」言語活動を行うかを意図的、計画的に考えることが必要となる。

理科における言語活動の具体場面

問題解決の過程～理科

- (1) 問題を見いだす場面
- (2) 予想や仮説を発想する場面
- (3) (予想や仮説の真偽を確かめるための) 実験方法を立案する場面
- (4) 実験の結果から考察を行い、話し合う場面
- (5) 結論として科学的な見方や考え方をもち場面

視点2

問題解決学習を基盤とし、「課題意識（問題意識）」や「解決への見通し」を持ち、「自ら考え、伝え合う場」を意図的・計画的に設定した学習過程の工夫と1単位時間の評価の在り方

《効果的な言語活動》

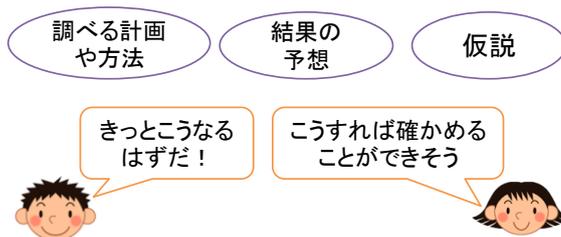
理科の学習において効果的な言語活動としては2つの場面が考えられる。

1つは、予想や仮説を発想する場面である。子どもたちは問い（課題）に対し、今までの経験や既習をもとに、思いを巡らせ、「きっとこうなるはず」「こうすれば確かめられる」という予想や仮説を立てる。そこで、話し合いをもつことで自分の考えをより強固にしたり、修正を加えて、考えを高めたりすることが考えられるからである。

もう一つは、実験結果から考察を行い、話し合う場面である。結果を受けて、自分の予想や仮説と照らし合わせ、比較、分析することで、「どうしてそういう結果になったか」という考えの転換、修正、強固がさらに行われ、仲間と共に学び合うことで、科学的な見方や考え方が育っていくと考えるからである。この二つの場面を中心に、意図的計画的に進めていく必要がある。

理科における言語活動の具体場面1

(2) 予想や仮説を発想する場面



理科における言語活動の具体場面2

(4) 実験の結果から考察を行い、話し合う場面

「結果をもとに考える場面」

できるだけ科学的な用語や図などを活用

「特に科学的な見方や考え方が育つ場面」

